

上山草人年譜稿 (二)

——谷崎潤一郎との交友を中心に——

細江 光

(お断り)

本稿は、「甲南女子大学文学部研究紀要」(第38号 平成十四年三月刊)に掲載したものの続編で、今後、本誌と紀要に連載する予定である。

◆明治四十四年◆(1911)二十八歳

★この年、草人と浦路の間に次女²子誕生。同じ病院で死産して困っていた夏原マサという人に貰って貰う(三田照子「ハリウッドの怪優」)。

銀座日吉町に洋画家松山省三がカフェー・ブランタンを開業(池田文痴庵「日本洋菓子史」)。

※吉井勇の『わが回想録』「青春回顧」によれば、

3

4?

・24

ブランタンと命名したのは小山内薫。客は文士・画家・俳優・新聞雑誌関係者が多かった。壁には上山草人の自画像など、一面に落書きがあった。

※「新劇三十五年史を語る」で、草人は、あの広間の天井には「草人閑居して不善をなす」と書いてあったと語っている。

文芸協会会長に就任した坪内逍遙宅での集會に、草人も参加。浦路は欠席(「後期文芸協会の日誌」)。

『蛇酒』によると、草人は、演劇研究所の試験を受けに来た「時事新報」少年部記者・杉村俊夫と親しくなった。杉村は、青山学院で同窓だった柴田勝衛を草人に引き合わせた。

※松本克平『日本新劇史』によれば、杉村は文芸協会学生名簿では二期生で、名前は繁夫となっている。月謝未納と欠席で除名された。

帝国劇場で、文芸協会公演。シェークスピア『ハムレット』で、浦路がガートルード、松井須磨子がオフィーリアなど(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。
 ※浦路の才能が認められる(戸板康二『近代女優史』河竹繁俊『坪内逍遙』)。

※田中栄三『新劇その昔』によれば、興行的には成功したが、インテリ青年層には不評。その主因は、土肥春曙のハムレットが型にはまり過ぎていたため。須磨子のオフィーリアも余りバツとしなかった。東儀鉄笛の墓堀男が絶品と称賛されたのは、非常にリアルだったから。当時の青年は型に嵌ったものを極端に嫌っていた。演劇研究所一期生には、この公演が卒業試験だった。

※木村毅『日米文化交渉史』『学芸風俗編』によれば、逍遙の台本は、雅語・古語が多すぎたせいもある。この失敗から、逍遙は以後、現代語を基調としてシェークスピアを翻訳するようになった。

24

「読売新聞」「文芸協会の生立」(八)「楽屋の内外」に、草人と浦路の子は三人、草人は「ハムレット」ではマーセラス役だったのを、望んで楽屋の扮装係になったとも、落膽症のために出演しなかったとも言う、などとする。

6・1

坪内逍遙宅での慰勞茶話会に、草人・浦路も出席(後期文芸協会の日誌)。

10

演劇研究所卒業式。女子は松井須磨子と上山浦路の二人だけ。草人も卒業(田中栄三『明治大正新劇史資料』・「後期文芸協会の日誌」)。

7・1

大阪角座でも『ハムレット』上演(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

7

※大阪の松竹と契約が成立したため。観客の入りは帝劇同様良かった(秋庭太郎『日本新劇史』)。

※戸板康二編『対談日本新劇史』の吉田幸三郎の証言によれば、浦路は立派だったが大根だった。大阪で、二日目ぐらいの晩に、浦路の寝床に林和が這い込んで、夫婦で逍遙に訴え、一旦はなだめられたが、翌晩、草人がビールを林にぶっかけ、自分たちは東京に帰ると言い出した。もともと草人は『ハムレッ

ト」のレオチーズ役を林に取られ、弁当番をさせられていたことを不満に思っていた。逍遙がなだめて、浦路は最後まで勤めた。

幹事会で、草人・浦路・林和には、坪内会長から訓諭を加えた上、退会させることに決定。第一回私演は「ヘッタ・ガブラー」か「ノラ」、第二回公演は「オセロ」と決定（『後期文芸協会の日誌』）。

※伊原青々園『続団菊以後』によれば、帰京後に緊急の幹部会があり、伊原も出席。上山夫妻の処遇が議題で、退会と決まったが、逍遙も他の幹部も二人に好意を持っていて、個人の情誼はその後も変わらなかった。それまでは浦路の方が須磨子より一枚上の女優だったが、浦路が辞めた為、須磨子が急に協会の一枚看板の女優となった。

※「新劇三十五年史を語る」で草人は、「文芸協会第二回公演は、浦路で『ヘッタ・ガブラー』をやることになっていた。その頃の須磨子では、浦路の方が柄だった。しかし、大阪公演後、浦路が協会を出たため、『ノラ』をやる事になり、須磨子が台頭した、と発言。

「読売新聞」(M44・8・27)「帝國劇場へ 上山浦路子の行きし途」によれば、草人夫妻はこの日、退会を命じられた。しかし逍遙は、二人が独立して劇界に打って出る時には、文芸協会の別派と称するも可、脚本も同一のものを使って良い、逍遙の名も使って良いとまで言って、別れの言葉とした。今秋、文芸協会が演じるはずだった『ヘッタ・ガブラー』が「人形の家」に変わったのは、浦路を失った為である。

※「ヘッタと浦路子」(M45・6・6「読売新聞」)によれば、文芸協会を辞める時、逍遙は浦路に「舞台も貸し、講義にも行き、顧問にもなってやるからヘッタをやれ」と言った。

※「後期文芸協会の日誌」7月28日幹事会記録によれば、草人・浦路に対しては、坪内会長の他、幹事の島村・辻・東儀・土肥が立ち会って、申し渡し、穏やかに結了した。

帝國劇場に歌劇部が新設されることになり、第一期生に応募した男子百五十名、女子二十三名の志願者の内、合格者は男女各十一名（『音楽界』九・十月

号記事)。

※浦路は、石井漢・沢モリノらと共に採用された
〔「帝劇十年史」〕。

※「蛇酒」によれば、浦路の帝国劇場時代、子供ら
は桜田本郷町の祖父母の家で育てられた。

「読売新聞」「帝国劇場へ 上山浦路子の行きし途」
によれば、帝劇では、所属の女優たちが非芸術的で
あることを憂いていた所へ、浦路が文芸協会を退い
たと聞いて、西野専務が松居松葉を介して歌劇部へ
勧誘した。その裏では、浦路を将米歌劇以外の舞台
に立たせる約束をしていると言う。

※「ヘッタと浦路子」によれば、浦路は音楽学校に
声楽を学び、ドイツ人にピアノを習ったこともあつ
た。「帝国劇場へ 上山浦路子の行きし途」によれ
ば、浦路は三世宗家観世清康(みよむね)の弟子で、九番の許し
を得ている程の咽喉達者である。

「読売新聞」11・24「郊西会の文芸会」によると、
千駄ヶ谷・淀橋・中野・大久保などに住む人々の郊
西団樂会第一回が、淀橋浄水所前精華高等女学校講
堂で開かれ、出し物の一つとして、北村季晴・初子

・
27

11・
23

夫妻がピアノとヴァイオリン合奏、浦路と角川千草

子が島崎藤村作「葡萄樹のかげ」を琴で演奏した。

※草人が北村夫妻の演芸同志会(後出)に出演する
関係で、浦路が出たのであろう。

※角川千草子は、恐らくM45・1・5「読売新聞」
に出る夢野千草と同一人物で、「蛇酒」に出る「泡
野小草」のモデルであろう。「蛇酒」によれば、横
浜の酒屋の娘で、芸名は草人が付けた「角川は草人
の母の姓」。浦路と仲が良く、よくかかしやに遊び
に来ていた。浦路と琴を並べて、島崎藤村・三木露
風などの詩や草人の作った小唄に節を付けて唄った
りした。

「読売新聞」「演劇界」欄によると、草人は演芸同
志会に入り、イブセン劇「幽霊」の指物師イングス
トランドに扮する。

帝国劇場でサルコリーと柴田環の主演で、マスカ
ーニのオペラ「カヴァレリア・ルスチカーナ」の一部
分を上演。日本人が参加したイタリア・オペラ上演
の嚆矢。浦路も含めて歌劇部の女性七人が初めて舞
台に立ち、参詣者の役を演じた(増井敬二『日本の

・
24

12・
25

1・
3

◆明治四十五年(大正元年)◆(1912)二十九歳

1

草人と浦路の間に三女藤子誕生。東京荏原中延の大工・岡田伊三吉に引き取られる(三田照子『ハリウッドの怪優』)。

※草人の艸と浦路の路を取って、落子と名付けられた(『大阪朝日新聞』S6・7・9記事)。

・4

午後3時から紅葉館で「読売新聞」主催の新年会。谷崎は招待客として出席。余興として、浦路と夢野千草が島崎藤村作「葡萄樹のかげ」を琴で演奏した。草人も付き添い人として一寸顔を出した(『読売新聞』1・5)。

・12

有楽座で、音楽家北村季晴・初子夫妻の演芸同志会第二回公演として、イブセン作森鷗外訳『幽霊』とピョルソン作森鷗外訳『手袋』を上演。草人は『幽霊』の指物師エンゲストランドと『手袋』の行商ホップ役で出演。演芸同志会は、北村夫妻が藤沢の俳優養成所で声楽を教えていた縁で、養成所の有志と組織したものが、二回で潰れた(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

・13

※田中栄三『新劇その昔』によれば、北村夫妻が鷗外に『幽霊』の翻訳を依頼した所、鷗外はたった四晩で訳した。土岐善磨が「朝日新聞」に書いた「新しい女 ドンプラコ夫人」によれば、この興行だけで千円もの赤字が出た。

※『蛇酒』によれば、草人は跛足の酔漢の指物師を演じるために、横浜の埠頭まで出掛けて行って、跛足の船夫の足の引きずり方を研究した。草人は、この頃から、扮装術・表情術に関する内外の参考書を掻き集めて、かなり大部な著作物に取り掛かっていた。扮装術・表情術に関しては、自信を持っていた。

※『鷗外日記』には、M43・8・23北村夫妻来訪、9・11『幽霊』訳了、9・17北村夫妻と演芸のことを相談、とある。しかし田中栄三『新劇その昔』によれば、田中が陸軍省医務局に鷗外を訪ねて依頼したと言う。その時、清書した『ファウスト』の訳稿が二冊机上にあり、「これをやるように北村氏に話してくれ」と言われて一冊預かったが、北村氏は、大物過ぎて出来ないいと辞退した。

鷗外は茉莉らと共に、夜、有楽座で『幽霊』を見る

〔國外日記〕。
 「読売新聞」に青い鳥の劇評「幽霊」と「手袋」掲載。登場諸氏の中で最も光って居たのは上山草人のエングストランド、とする。

帝国劇場で杉谷代水作詞、ユンケル作曲のオペラ『熊野』上演。熊野を柴田環、朝顔を浦路。日本人が熟知している謡曲に西洋の音楽を付けたために、違和感から観客の失笑を買い、全くの不評に終わった（増井敬二『日本のオペラ』）。

※栗島狭衣「女優萬々歳」（T2／1「趣味」）によれば、『ヘッタ』の浦路は観ていないが、朝顔を観たのと平生の付き合いから言えば、体格容貌が立派。芸に貞潔、謙讓、前途多望とする。

雜司ヶ谷で森の会が開かれた（『文章世界』M45／4）。

※谷崎『上山草人のこと』によれば、谷崎と草人の初対面。他に吉江孤雁・秋田雨雀・長田幹彦・前田兎らが居た。

伊庭孝が『演劇評論』を創刊（日本近代文学館に、

5月の2号まで所蔵）。

※伊庭の脚本『接吻』が原因で発禁（『坪内逍遙事典』）。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」（『演劇研究』T14／1）

によれば、伊庭は警醒社の洋書係、柴田勝衛は教文館の外国図書整理係だったため、仕事の関係で知り合った。柴田は前田鬼の世話で『文章世界』に寄稿し、伊庭は教文館へ出入りしている内に田山花袋と知り合って、『文章世界』へ書くようになった【伊庭はM43／5、8、柴田はM43／9、M45／4／7など】。伊庭が『演劇評論』を創刊した時には、そのエキセプションに、柴田が海外劇壇の紹介を書いた。すると、文芸協会を病氣のために退いた杉村敏夫が、青山学院での旧友・柴田の所に、上山草人と芝居をして、坪内逍遙や文芸協会の人たちを見返してやりたいという話を持ち込み、伊庭も加わることになった。これ以前から、草人はかかしやの二階で一条汐路・河合磯代（山田耕柞則夫人）・中山歌子・夢野千草・角海老のお職某らにエロキューションを教えつつ、他日の雄飛を夢見ていた。

※柴田勝衛「近代劇協会の事ども」（『新演芸』T14

／＼)では、「演劇評論」は伊庭と柴田の共同出資。「蛇酒」によれば、柴山勝衛がお膳立てをして、伊庭孝の親戚で資産家の千葉鉦蔵(掬香)の上根岸の屋敷で、草人と伊庭孝・千葉掬香が初めて会った。伊庭は数カ国語に堪能。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」(T14/1)によれば、近代劇協会の第一回公演には、浦路がヘッダにはまり役だということで、イアセンの『ヘッダ・ガブラー』を演ることになっていたが、その翻訳者が千葉掬香だったので、翻訳を借りる都合からも、千葉と従兄弟の間柄だった伊庭を引っ張り込んだ。千葉は、教文館で始終本を買うため、柴田とも懇意だったし、有楽座の株主でもあった。

「読売新聞」連載「文芸に現はれたる好きな女と嫌ひな女」(四十)に、浦路の回答掲載。「ロミオとジュリエット」のジュリエットに好感。イアセン「幽霊」のオスワルドの母は不快。自分も、もろくともピュアなジュリエットに近い生き方をしたい、と述べている。

・28 「蛇酒」によれば、この日、近代劇協会創設。かか

しやの表に白木の看板を掲げた。旗揚げ狂言は千葉が訳した『ヘッダ・ガブラー』と決める。稽古場は最初、日吉町の教会堂の一室、次いで佐久間町の葎会所の二階、さらに青山学院が夏休みに入ってから、そこに付属する建物の二階を借りた。テスマン役の男優が足りない為、草人が美術学校時代の級友・浅井松彦を口説き落としたり。テヤ役には、不満足ながら、一条汐路を頼んだ。女性の役は、女形ではなくすべて女優を用いる事が主義でもあり、誇りでもあった。他に三輪糸子が居たが、公演後、オーストラリアからフランスへ渡った。女優を捜すのは困難を極め、花屋の看板娘を狙って父親に断られるなど、苦労が多かった。

※女優探しの苦労は、草人の「女優」さんやい探して歩いたあの頃」(S15博文館「芸談百話」所収)にも出る。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」(T14/1)によれば、最初、伊庭は舞台監督だけの予定で、判事ブラック役は北村季晴だったが、途中で北村がブラック役は厭だと言い出したため、代わりに伊庭が舞台上立つ

ことになった。最初、京橋の銀座教会、夏になってからは青山学院の教師館を稽古場にしたが、いずれも苦情が出て、南佐久間町の暮会所の二階に落ち着いた。暮会所に移ってからは、草人・伊庭・柴田・杉村が権利義務同等ということにして三円づつ出し合い、九円の間代と茶・菓子代三円に宛てた。その内、弁当を取る金もなくなり、牛乳とパンばかり食べた。

※伊庭孝「存立つ」(『兩安居莊雜筆』)によれば、諸名士を賛助員に担ぎ上げるため、紹介状を持って、方々を歩きまわった。草人夫妻と田中正平博士を訪ねて断られたのは例外だった。

※柴田勝衛「近代劇協会の事ども」によれば、演技を完全にする為には、平素の起居振舞から改造しなければならぬという持論のもとに、激しい練習を行った。また京橋教会を借りて、草人が扮装術と演出法、伊庭が発声法と音楽理論、杉村が雄弁術と演劇史、柴田が外国語と外国文学を教え、俳優たちの頭脳・肉体を根本的に改造しようとした。

※武田正憲「諸国女ばなし」によると、草人は門下

6・1

の女優の名に路を付けた。一條汐路は、草人の従弟でアメリカで成功した馬車屋が落籍した四谷の芸者。玉村歌路は、伊庭孝の友人で皇室中心主義の社会主義者・遠藤無水の紹介で伊庭の所へ来た伊庭門下で、兼房小町と呼ばれた芝兼房町の薪屋の手取娘。上山珊瑚は二代目で、初代は宇野浩二の『転々』(『文章世界』T8/10)に出て来るヒステリー女優のモデルで、元有楽座女優福田稲子【T3『ノラ』】「ハンネレの昇天」に出た小村珊瑚か?。稲子は栗島派文士劇の女優で、もと山口桜村の父の家の小間使いだった。その内縁の夫が鍋井克之。波川下早も草人門下。瀬川つる子は元ロシー・オペラに居た人で、前身は大正芸者の半玉。笹川不美子は佐藤春夫の二度目の妻になったが、常盤座で女優の世話係のようなことをしていた時、金竜館の曾我廼家五九郎一座の扇蝶と浮気をしていた【『月刊東京』T15/9記事】によれば、佐藤春夫は大正七年二月九日、新富で笹川ふみ子と再婚。ふみ子は川路歌子の妹分の女優。衣川孔雀の弟子とも言う【】。

帝国劇場でオペラ『釈迦』上演。浦路は舞姫の一人

として端役で出演（増井敬二『日本のオペラ』）。
 「読売新聞」「よみうり抄」近代劇協会設立。上山
 浦路子は某富豪の後援を得て近々設立される近代劇
 協会で社会劇の女主人公に扮する。

「読売新聞」「新しい女」（一八）「ヘッタと浦路子」。
 近代劇協会は、九月に有楽座で『ヘッタ・ガブラー』。
 千葉榊香の訳に英訳を対照し、ノルウェイ人につい
 て原書と読み合わす。草人と浦路には男の子二人・
 女の子二人が居る。

※松本克平『日本新劇史』によれば、当初は九月十
 八〜二十日の予定だった。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」（T14/1）によれば、
 有楽座の借賃百円が払えず、千葉榊香に頼むと、現
 金を出すのは厭だが保証の一札を書くということで、
 どうにか借りられた。

明治天皇が崩御。服喪と有楽座の都合により、旗揚
 げ公演は十月下旬に延期（『蛇酒』）。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」（『演劇研究』T14/1、
 12）によれば、明治天皇の病気で芝居がどうなるか
 分からないため、伊庭が侍医の井上通泰に御病状を

訊きに行った所、恐ろしく怒られた。その後、切符
 が出来上がり、千葉榊香の紹介で、実業家・華族を
 自動車で歴訪して、切符を売って回り、背景や衣裳
 の費用にあてた。

『蛇酒』によれば、女優探しの帰途、草人・伊庭・
 柴田・杉村は、カフェー・パウリスタで、後の衣川
 孔雀を初めて見掛けた。この頃、孔雀はタイプライ
 ターの稽古に京橋の西洋人の事務所に通っていた。
 「近代思想」創刊号に伊庭孝が対話「本当に隣され
 て居る男」を寄稿。

※荒畑寒村の地六社版復刻版「近代思想」解説によ
 ると、売文社の高島素之と伊庭孝が同志社で学友だっ
 た関係で伊庭が寄稿し、伊庭の関係で草人も寄稿し
 た。メーゾン鴻の果で毎月一回行われた同人と寄稿
 家小集には、伊庭・草人が常連として参加していた。
 ※「近代思想」には、荒畑寒村による「近代劇論」
 の翻訳や劇評、『ファウスト』論、寒村自作の戯曲、
 堺利彦によるバーナード・ショウの脚本の粗筋紹介
 や「人と超人」の翻訳、大杉栄の「人と超人」論、
 和氣律次郎の訳したストリントベルクの『役者の芸

術』などが載っており、新劇運動とも関わる部分があった。

「読売新聞」記事「近代劇協会発会」によれば、昨夜、近代劇協会は、赤坂八百助で披露宴を開いた。主人側が真面目な演劇の書生だけに、少しの臭味もなく清話を交換した。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」によれば、文芸協会に対抗するため、新聞記者を招待し、芸者を呼んで饗応しながら旗挙げを宣伝した。

「読売新聞」記事「近代劇協会の揺籃」によれば、21日？ 芝佐久間町の円形倶楽部に皆が集まっている。書割りを急に変更することになり、昨夜、徹夜で設計して改造を指示した。草人は前日或る建築家が貸してくれたノルウェイの詳しい家屋建築図を記者に見せる。室内は板張りにし、天井だけ灰緑色に塗るのだと言う。浦路は有楽座に出動する。参考書や外国雑誌が床の間に置かれている。

（日付は新聞による）、有楽座で近代劇協会第一回興行。イブセン作千葉掬香訳『ヘッタ・ガブラー』。浦路のヘッタ、草人のレーヴェホルク、伊庭のブラッ

ク判事、一条汐路のテヤなど。三日間満員で、二日間日延べをした（田中栄三『明治大正新劇史資料』）
 ※伊庭孝「新劇壇一昔話」によれば、大入り満員だったにもかかわらず、草人が濫費家だったため、利益は上がらなかった。坪内逍遙が二日目に見に来た際、草人は「もうこれで死んでも恨む所はない」と言った。柴田はこの公演中に、「時事新報」に入社した。「やまと新聞」の劇評家だった水谷竹紫が毎日楽屋を訪ねて来てくれ、伊庭は毎回竹紫が着て来る当時珍しいスプリングコートを借りて、舞台を勧めた。
 ※「東京日日新聞」T3・2・1「滅び行く新劇団（五）」によれば、草人は公演前に必ず一万近くの切符を売って、何日間満員切符売切れなどと盛んな広告をする。

※この時、浦路は上山浦路から山川浦路へと改名した（『日本映画俳優全集・男優編』）。

※工藤美代子「聖林のモンゴル王子」によれば、浦路は興行を打つ度に、莫大な金を実家に無心した。

※田中栄三「新劇その昔」によれば、素人が多かったため、テスマンをやった洋画家の浅井松彦が、衣裳を

替りに引っ込んだきり出て来なくて舞台に大穴を開けたり、伯母役の三輪糸子が出場を間違えて出て来たり、初日の舞台は散々だったが、イブセン・ブームに乗って満員続きだった。しかし、小山内薫は、芸者上がりの俄女優や素人の寄せ集めでイブセンを上演する事は、近代劇運動の自壊行為だと憤慨していた。

※東京市芝区日蔭町一ノ一「近代劇協会内浦路後援会事務所」御中という入会申込用未使用の葉書有り（細江所蔵）。会員は、浦路が近代劇協会に出演する際、番組筋書きと観劇券一枚と引き換えに一円を納付する義務がある。ただし、近代劇協会の東京に於ける公演は年三回の予定、といった説明が印刷されている。他に、朱印で、「大正元年十月廿五六七日開催」「有楽座に於て第一回興行」「東京府下西大久保 大久保文学倶楽部」とある。

※「東京日日新聞」T1・10・25記事中の柴田柴庵（勝衛）の談話によれば、芸術と事業との調和を図らんがためにイブセンの作を選んだ。俳優が少ないので、登場人物の少ない「ヘッダ・ガアブレル」と

決めた。上山夫妻以外は素人だが、六月から南佐久間町の稽古場で熱心に稽古を積み、本月一日から十日までは毎日四時間、十一日からは毎日八時間稽古している。同記事中の浦路の談話には、「私は帝劇のオペラ部練習生となっています。今回の上演について、坪内逍遙が賛助員として力を入れて下さる。七八月は御大葬で御遠慮申し上げます」、などとある。

※「歌舞伎」一五〇号に批判的な批評が出る。

※高田保『青春スクラップ』によれば、高田は中学五年の時、先輩の矢口達に誘われてこの公演を観た。新劇を見たのは初めてだったが、草人のレオポルフをひどく下手だと思い、伊庭孝の判事ブラックをひどく達者だと感心した。

※岩野泡鳴『目黒日記』によれば、26日に「ヘッダ・ガブラー」を観、27日に「近代劇協会の第一回興行」を執筆。

「読売新聞」記事「近代劇協会の「ヘッダ」」によれば、昨夜は満員。秋声・小波・御風・木城・孤雁・広業らも来ていた。草人・浦路・伊庭ともにややマ

ンネリズムに囚われている所がある。

「読売新聞」記事「ヘッダ」の口延べ」。近代劇協会の第二夜は、前夜にも増す盛況のため、二日間口延べとなった。昨夜の主な観客は、森鷗外夫妻・内田魯庵・犬養毅・岡田和一郎・和田英作・寺崎広業・夏目漱石・幸田露伴・柳沢伯・伊達男・佐々木信綱・本野英吉郎・小宮豊隆・岡田八千代・長谷川時雨・中谷徳太郎・川村花菱・千葉掬香・エリセーフ・仲田勝之助など。同紙の(黒田) 鷗心生「銀座より」では伊庭と草人が好評とし、土曜劇場・とりで社試演会などとともに、未熟ながら相当に面白かったと好意的。「ヘッダ」の写真も掲載。

浦路が森鷗外を初訪問(『鷗外日記』)。

「読売新聞」市川又彦「近代劇協会のヘッダの印象」。登場人物がそれぞれ勝手に芝居をしていて、統一性がない。

有楽座で、文芸協会がショウウの『二十世紀』を上演

(『田中米三「明治大正新劇史資料」』)。

※「蛇酒」によれば、千秋楽の日に、近代劇協会同人が揃って観に行った際、有楽座の廊下で衣川孔雀

を再び見掛けた【ただし、「ヘッダ」の後、間もな
くの大正元年中の出来事としながら、大正二年二月
「思ひ出」の際と誤っている】。

「近代思想」に荒畑寒村の劇評「ヘッダと二十世紀」掲載。自由劇場・文芸協会・近代劇協会を比較すると、自由劇場が一番誇張的で、いかにも歌舞伎俳優のやっている新劇という感があり、文芸協会もまた非常に古い型に囚われていて不自然。近代劇協会は未成品の感はあるが一番ナチュラル。近代劇協会の中では、草人・浦路のような経験者より、素人の伊庭の演技が良かった。浦路は日本の毒婦のようだった、と評する。

柴田柴庵著「ヘッダ・ガブレルの研究」が近代劇協会から刊行される。「近代思想」12月号「新刊紹介」欄に紹介が出る。42ページの小冊子ながら、諸家の説を引いた真摯な研究、と評している。

※柴田は、大正二年六月にはストリンドベルヒの長編小説『女学生』を警醒社書店から刊行するなど、以後、翻訳家・北欧文学研究者として、著書が多い。「読売新聞」記事「楽焼と「マクベス」」によれば、

草人はこの所、楽焼に凝っている。そこに文士・画家や尾竹紅吉らが集まる。雪舟より古い絵も、メーテルリンクの「青い鳥」やフュチュリストの絵もある。22日には、温黨会の黨開きをする。その際には、次回上演予定の「マクベス」をクレীগやラインハルトのように演出しようという相談【実際にはその前に『ファウスト』を上演】や、最近見出した二百人入りの小劇場で、ウェーデキントの『春の目醒』のような禁物劇を少数の見物だけに内緒で見せようとの話もある。今後は、浦路の他に、目下養成中の素晴らしい女優を出す。

※『蛇酒』によれば、草人は板谷波山から楽焼の伝授を受けた。

※伊庭孝「新劇壇・昔話」によれば、草人が楽焼を始めたのは、第一回興行で利益を上げられなかったためで、人心収攬を狙って、二〇〇円ばかりかけて壺を二階の押入の中に作った。すると、その楽焼が面白いので新聞記者や画家が集まり、切符の捌け口が広がった。その時、楽焼を描きに集まって来た画家の中に、小林古徑・矢沢弦月・前田青邨・野口

・ 25

某などが居た。草人はその時既に、小林古徑は今に偉くなる、と予言していた。

浦路の日記「朝から晩まで」(「趣味」T2/1)によれば、朝食後、すぐ草人は研究生にジュリエットなどシェークスピア劇のせりふ指導。浦路は店の用事で出掛ける。途中、京橋際の発明品展覧会にかかしやの特製品を出品してあるのを見に入る。その後大西白牡丹で注文を受け、「まからんや」に寄って白木屋への納品伝票を渡し、三越に注文の眉墨を納める。その後、帝劇で一時間、声楽の稽古。次いで、ロシーのバントマイムの稽古。帝劇からの帰途、かねやすに寄って、眉墨を卸す。「どんどん売れるのに回ってくれないから切らして断ってばかり居た」と言われる。池の端の小間物屋では、「この辺ではお宅の頬紅がよく売れる、「さかるや」ではお宅の碁石形が大層好評です」などと聞かされる。「たしからや」へ寄ると眉墨の注文がある。「後からお届け致します」と言い置いて帰る。電車で霞町の芸者お八重さんと乗り合わせ、この次もあなたの芝居にはきっと参りますと言われる。夜8時、関如来と仲

木貞一が来訪。一緒に新橋へ洋行する小山内薫を見送りに行く。その帰りに秋田雨雀と仲木貞一が立ち寄り、十一時半まで話す。草人はこの一週間程、陶器の絵の具の研究で引き続いて夜更かし。

※「読売新聞」T2・1・1秋田雨雀「劇作の懷疑」に、小山内薫を見送った後、草人夫妻と仲木に捕まっ
て、草人の家で話し込んだ、と出る。

浦路が鷗外を再訪（『鷗外日記』）。

暮も押し詰まってから、草人は銀座で偶然衣川孔雀と二度目の出会いをし、互いに見つめ合う（『蛇酒』）。